

Blue Moon

映像学科
高山隆一

Blue Moon

Department of Imaging Art
TAKAYAMA Ryuichi

「Blue Moon」探録のつづき

製作・監督・脚本 高山隆一

登場人物

咲・・・川村ゆきえ

彩・・・坪井麻里子

○シャッター前

彩のバイクが置いてある。

彩、そばにもう一台バイクを置く。

彩、サイトスタントを掛ける。

それを見つめる咲。

彩、ライダーズジャケットにタイツはきかへる。

咲、ゆつたりとした口元。

彩「これでいい？」

咲「ありがとう。お姉ちゃん」

彩、ゆっくりバイクのタンクを撫でながら

彩「やっぱり、お父さんのバイクいいね。咲にはもったいない。」

咲、悲しげな笑顔。

○タイトル『Blue Moon』

○同シャッター前

シャッターの反対側に折り畳み椅子に座り、コップのヌカカシアを飲んでいる二人。

彩、髪の手を束ねている。

彩「あれでよかった？」

咲「ありがとう。お姉ちゃんのバイク、やっぱりすごいね。」

彩「全然。好きだけど8年落ちの中古車だよ。そろそろまではいくんだけどやっぱり最後はかわられる。

新しいバイクにはかなわない。」

咲「私のは・・・」

彩「お父さんの乗ってたバイクだよ。私欲しかっただよ。なんであなたに・・・」

咲「妹の方が可愛いんだよ。」

彩「双子なのに？」

咲、真面目な顔になり

咲「双子だからだよ。」

彩「何それ？」

咲「双子だからって二倍愛せないんだよ。」

(画)

咲「お姉ちゃん、お父さんのバイク貰ってくれる？ 売るのが嫌なの。」

少し動揺する彩。

咲、手のヌカカシアを見せながら

咲「昨日してもらってきた。少し高かったけど。おれいだしも。今日で女の事も終わリだから。バイクも終わリ。」

彩「・・・」

咲、ためらいながら

咲「私たちと同じ双子みたい。」

彩「決めたんだ？」

咲「相手には頼れない。もつ会えないし、会わない。」

沈黙する二人。

彩、突然

彩「誇り高き少数精鋭。」

咲「・・・。」

彩「安心して、迎撃は慣れてるから。」

咲「ありがとう。ただね。代わりにこれ入れてきた。」

咲、肩を出して蝶のタトゥーを見せる。

彩、覗き込む。

彩「心意気か。」

咲「シラフじゃないんだから。」

咲、カッパを置き立ち上がり、バイクに近づきバイクをゆっくり撫でて泣き開れる。

見つめる彩。

× × ×

咲「これから走りに行くの？」

彩「まだ早いから新型の若造と勝負してくる。」

咲「気を付けてね。」

彩「どうせこっちが負けるんだけどね。そっちこそ身体大事に。何かあったら必ず連絡して。」

咲、不安そうに、

咲「お姉ちゃん・・・」

彩「わかってる。大丈夫、怖いのは私も同じ・・・お父ちゃんも言っていたよね。オートバイとは、『品格と志の両き者にこそ与えられし』」

咲「『賢者の創造物である。』」

二人笑いあう。

二人見つめあう。

彩、咲に近づく。咲の身体にゆっくり手を回す。彩、しっかりと包み込むように咲を抱きしめる。

彩「双子のくせに咲の方が胸が大きくてお尻が可愛い。」

咲、笑う。

咲「制服姿はお姉ちゃんが学校で一番だった。」

× × ×

咲、彩にキーホルダーのついた鍵を渡す。

彩、思い出したように

彩「今晚、月食らしいよ。全部隠れるの十一年ぶりだって。」

咲、続いて空を見上げる。

○同シャッター前（夕方）

夕刻、薄明かりの中、椅子の上に2つの花があるキャハトルが置かれている。

みつめる咲。

微かに微笑む咲。

○エンドロール

付記

記録映像 フルハイビジョン

記録装置 ステレオ方式

作品時間 十二分



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



(10)



(11)



(12)



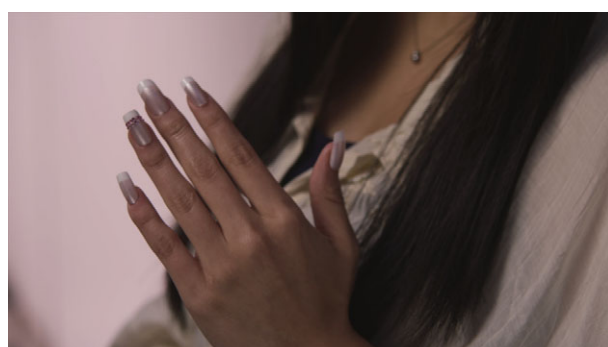
(13)



(14)



(15)



(16)



(17)



(18)



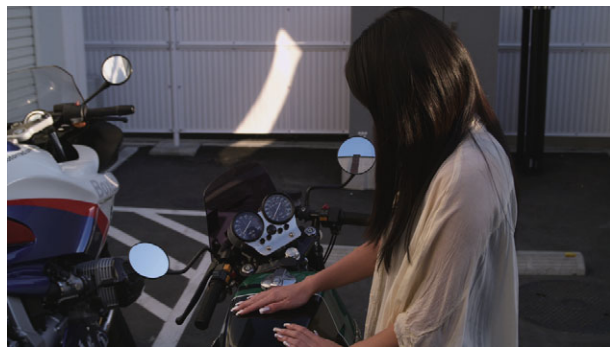
(19)



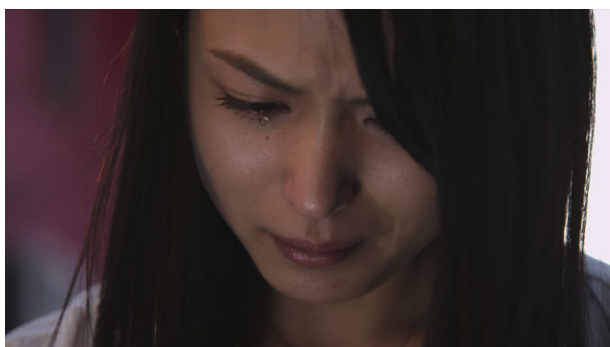
(20)



(21)



(22)



(23)



(24)



(25)



(26)



(27)



(28)



(29)



(30)



(31)



(32)



(33)



(34)



(35)



(36)



(37)



(38)



(39)



(40)



(41)



(42)



(43)



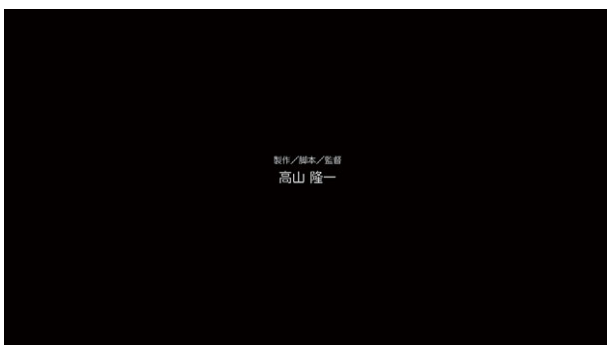
(44)



(45)



(46)



(47)